

第6章 入学関連のグローバル化に関する実績

6.1 取り組みの概要

本章では、入学関連のグローバル化の取り組みについての実績について報告する。入学関連のグローバル化について、入学グローバル化 PT では、構想調書に記述された入学から卒業までの学生データの一元化、高大接続 FD 等について取り組んでおり、本章ではこの部分についての進捗を報告する。

6.2 現状と成果

本プロジェクトの主な成果は次の通りである。

6.2.1 高大連携の英語教育に関する FD

これまで、平成 24 年度の構想調書執筆時点から、入学グローバル化 PT では、高校と大学の学びの実態に合った、英語教育の実施について高大が連携して検討する旨を目指してきた。

本事業開始から、平成 26 年度前期までは、本タスクにどのような実施困難性があるかを整理し、上記の目的を達成するための方策を検討した平成 26 年度 9 月に、今年度実行可能なタスクとして附属高校と大学とで取り組む、「高大連携 FD」を実施した。

成果としては、平成 26 年度 9 月までに、入学 PT 会議にて、本タスクの実施困難性があるかを整理した。具体的には、大学と高校とで、根本的な教育観を一貫して持っているところから高大連携がなされてきた訳ではなく、互いに、連携すべき所（例えば、附属高校生へ本学の教員が高校に訪問して学部説明や模擬授業を行う高大連携の実施、附属高校生向けの本学学生によるキャンパスツアー。）について、協力体制の在り方を模索している段階であることが挙げられる。すなわち、高校側も大学側も、それぞれのよりよい教育プログラムの実現には余念がないが、高校側と大学側が「同法人の教職員である」という一体感を持つには未だ至っておらず、このため、目的を同じくしていても、なかなか連携にメリットを見出せず、連携体制が取りにくい（調整過程で情報に齟齬が生じやすい）状況となっていた。

そこで、平成 26 年度は、附属校の英語担当教員と、本学の英語担当教員にまずは交流の機会を作り、アイスブレイクを重視した連携 FD を実施する事とした。具体的には、アイスブレイクによる本 PT メンバーと高校教諭との交流、全学共通教育の習熟度別必修英語授業「基礎英語」クラスと、「TOEIC 初級」クラスの 2 つの見学、その後の意見交換で、互いに高大連携のメリットを洗い出すという高大連携 FD を実施した。

日程調整も、実施形態も一筋縄ではいかない困難さがあったが、高校側の校長や英語担当教諭の努力があり、本 PT リーダーも頻繁に高校に足を運び調整した結果、12 月 9 日 (火)9:40-13:00、12 号館 5 階 12523 教室にて、実施した。

初の試みとなる高大連携 FD では、高校教員、大学教職員、共に終始笑顔の絶えない状況を得るに至ることができた。交流の第一歩としては成功したと言える。その上で、高校教員側も大学教員側も、自身の英語教育観や、これまで受けてきた英語教育に関する所感、現在の生徒・

学生への所感等を交換するに至り、具体的な信頼関係を構築する為の互いの基礎情報についても、得るものがあったと考える。

見学した授業の改善点については、

- ・(高校側)(1つめの見学授業について) 教員のバイタリティを感じた一方、一方通行になってしまいがちで、学生が他の事をしていたり、寝ている学生が一部に出ている。学生のアクティビティを引き出す工夫が必要ではないか。
- ・(高校側)(2つめの見学授業について) 学生達もよく予習をしてきており、先生のテンポも良かった。発音もとても綺麗で、学生達が「この先生に付いていこう！」と思えるのではないか。
- ・(大学側)(2つめの見学授業について) 1年生向けの必修授業だった。『その場で辞書をひく』ということ徹底させるというのは、学部の専門の英語授業でも同じなのだが、かなり徹底して「英語をしゃべる」「発音する」ということを、取り組ませているように感じた。今回のような授業内容を前提として、学部の専門を絡めた語学授業を設計したい。

といった、具体的な意見が得られた。担当教員にフィードバックし、今後の教授活動に活かして頂く予定である。

今後の高大連携の可能性については、

- ・(大学側) 今回のことを受けて、高校側の授業を見に行きたいという思いが強くなった。双方向で、互いに見学し合う、という形ができれば良いと思う。大学側と高校側が互いに顔を合わせるとい、こういう機会を今後定期的に持った方が、大学側にとっても良いと思った。
- ・(大学側) 高校の先生がたは忙しく、なかなか大学キャンパスまでは来にくいとおっしゃっている。今後、高校側に授業見学させていただくという形で、お邪魔できれば、より本タスクの主旨に近い形で実施できる。これまで、父兄参観の日に、本学教員がお邪魔した前例もあるため、そこにFDプログラムを追加的に実施する形でも良いと思う。
- ・(大学側) 高校側に高大9年間の学びについての情報発信についてニーズがあることが分かった。是非、教育情報の発信という観点からも、情報出しをすべきだと感じた。
- ・(高校側) ESSの生徒達を連れて、ラーニングコモンズのような場所で学生と生徒が英語でディスカッションするようなイベントが実現できれば、互いにとって刺激的な経験になるのではないか。
- ・(高校側) 高校生が大学に入学した後の英語学習について、具体的にイメージできるようなイベント(?)ができればと思う。
- ・(高校側) 高校から大学への9年間の英語の取り組みについて、本学の魅力を説明できるようにしたい。
- ・(高校側) 最初の機会だったが、有意義な時間が過ごせた。今後もこういう機会が持てたら良いと思う。

等の、非常に前向き、かつ具体的な発言を得ることができた。

今後は、得られた発言内容を整理し、具体的な取り組みとして各部署に提案していく必要がある。

また、継続的に実施すべきとの声も多かったことから、高大連携FDを継続的に実施するた

めの組織体制について検討する。

6.2.2 入学センターデータの一元化

入学センターのデータを全学で共有し、部局横断で入り口戦略を検討するというのを、本タスクでは目的としている。

本学では、既に1つのデータベースに全部局のデータを集約して蓄積する体制をデータベース導入当初から貫いて実施している。このため、データそのものの一元化は当初から行われており、「様々な部局のデータを横断的に確認する」ということについては、「学びのポートフォリオ」という学生カルテシステムを導入し、学生ごとに、成績、クラブ、汎用的技能に係る調査結果、進路指導、修学指導等、様々な部局のデータを一覧できるようになっている。平成25年度からは、この学生カルテシステムに、非常勤講師も含め、全教員がアクセス可能となっている。

平成26年度から、経営情報も含めた全学の情報をグラフ化し、冊子として纏めるIRに関する冊子作成（毎年更新予定）も平成26年度から着手した。これは基本的には、理事会メンバー及び所属長向けの資料である。

このように、データの全学的な共有については、入学センターデータに限らず、進んでいっている状況である。一方、「部局横断で入り口戦略を検討する」ということについては、未着手の状態であった。

そこで、平成26年度は、本タスクをどのようにして達成すべきかということについて具体的な検討を行った。結果、入学センターと教学センターのデータを用い、入り口戦略や初年次教育に役立つ「問い」を入学PTメンバーで立て、横断的なデータを使用して分析を行い、分析結果を報告書として纏める、ということで、平成26年度9月に合意に至った。

ただし、本件については、他のタスクとの兼ね合いで、平成26年度の着手が難しいため、平成27年度に実施するタスクとした。分析結果の活用を促進するため、関係する部局に対する提案を含むように内容を構成する予定である。

6.2.3 外国語学部英語1科目型入試改革検討

改組された外国語学部の新たなカリキュラムが、平成26年度より施行された。これに伴い、平成25年度から、同学部の学生を募集する英語1科目型入試（以下「本入試」とよぶ）について、入学試験委員会（平成25年4月22日）、部局長会（同年5月8日）、理事会（同年5月30日）の承認を経て導入を決定した。昨年度に引き続き、今年度も本入試を実施した。

外国語学部では入学者受け入れの方針において次のように謳っている。

「外国語学部は、多様な言語とその関連領域、および国際関係に関わる教育を行うことにより、京都産業大学の建学の精神に適う人材を育成することをその教育の目的としている。とりわけ、言語についての体系的理解を基礎とした実践的な言語運用能力を習得し異文化理解および国際社会の今日的課題に対する理解を深めることにより、日本国内に限らず国際社会においても信頼され活躍できる人材を育成しようとしている。」

（平成25年度実績報告より抜粋）

このような方針にのっとり、外国語学部の新たなカリキュラムでは、「専攻言語科目の質と量を維持しながらも、英語を全学科の副専攻と位置づけ、高度な英語力を習得する」ことを企

図している。本入試においては、次のように趣旨を明らかにしている。「この制度は、マーク式の試験に加えて多様なテーマ（社会・自然科学領域等）に関する論述式の英語の試験を実施することにより、総合的、論理的思考力や高度な英語力を備えた優秀な学生を受け入れ、学部内の活性化を図ろうとするものです。」

本学では、入試の多くの形態が全学部共通の方式でおこなわれており、そのため従来は、AO入試をのぞき、学部各々の教育課程の個性を入試に反映させることが容易ではなかった。このようななか、外国語学部の取り組みは、ポリシーにのっとり、入試から教育課程までのつながりを意識したものである。

入学PTでは、英語1科目型入試によって入学した学生のGPA等の修学データに基づき、本入試制度の効果検証を行い、今後の制度設計に役立てる予定である。先に述べた教学データと入学データを接続した入り口戦略の検討（IR）を行う一貫として、平成27年度より、着手する予定である。

6.2.4 入試制度との関係の整理

平成26年度前期まで検討を行い、状況を整理した。結果、全学のAPと現在の全学的な入試制度とは、整合性が確認された。一方、全学部分を統一して行う入試と各学部のAPとは、直接的に結びつけることができない。このため、学部別に実施可能なAO入試に限り、各学部APや各学部の連携を図ることとした。AO入試で掲げる「求める人材像」は、各学部のAPと緩やかに連携するよう既に各学部で取り組んでいるが、連動の状況について、入学PTの視点から、整理することで合意した。平成27年度3月末までに、入学PTにて報告書の執筆を行う。

今後は、平成27年度末に上記の報告書を執筆し、整合性の結果と各学部のAO入試の特徴や強みについて、各学部、または教育支援研究開発センターにフィードバックする予定である。

6.3 まとめ

本章では、入学グローバル化PTより、入学関連のグローバル化に関する取り組みの成果について述べた。本PTの主な成果は、次の通りであった。

1. 本学附属高校での英語教員研修の実施の検討（6.2.1 に記述）
2. 入学時から卒業時までの学生情報の一元化の検討（6.2.2 に記述）
3. 外国語学部の改組に連動した入試制度改革の検討（6.2.3 に記述）
4. カリキュラムと一貫性のある入学前教育の検討（6.2.4 に記述）

今後も、これらの施策について、継続的に取り組んで行く。

